



TITLE:

# 光線としての言葉、あるいは可視化された世界：シュレーバーと自然科学と心霊学

AUTHOR(S):

熊谷, 哲哉

---

CITATION:

熊谷, 哲哉. 光線としての言葉、あるいは可視化された世界：シュレーバーと自然科学と心霊学. 文明構造論：京都大学大学院人間・環境学研究科現代文明論講座文明構造論分野論集 2005, 1: 23-46

ISSUE DATE:

2005-08-05

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/89704>

RIGHT:

## 光線としての言葉、あるいは可視化された世界 —シュレーバーと自然科学と心霊学—

熊谷 哲哉

はじめに

ダニエル・パウル・シュレーバーは、1842 年著名な整形外科医であり教育家・体操家としても知られていた、ダニエル・ゴットロープ・モーリツ・シュレーバー（1808～1861）の次男としてライプツィヒに生まれた。ライプツィヒ大学法学部を卒業後、裁判官として活躍するが、心身の不調のため入院。1894 年ふたたび病状が悪化し、こののち約 8 年半にわたって、ライプツィヒ大学精神科教授パウル・エーミール・フレックシヒのもとで入院生活を送った。この時期に彼は、さまざまな幻想や神の奇跡——それはとりわけ神との「神経接続」および「脱男性化」という言葉に代表される——を体験し、そこから得られた新たな宗教的世界観を『ある神経病者の回想録』という表題の下にまとめ、退院後の 1903 年に出版した。<sup>1</sup>

この本が出版された当時の状況についても、若干の説明をしておく必要があるだろう。シュレーバーの本を出版したオスヴァルト・ムッツェ社は、オカルティズムを中心とした多くの本や雑誌『心霊研究』の発行元であり、ドイツにおける心霊主義の一大拠点として知られていた。<sup>2</sup>

心霊主義、あるいは心霊学は、メスメリズムのように、すでに 19 世紀以前から流行しており、ルートヴィヒ・ビューヒナー（1824～1899）やマルクス（1818～1883）のような唯物論者によって、批判・嘲笑されてきた。

---

<sup>1</sup> 『ある神経病者の回想録』（以下『回想録』）については Schreber, Daniel Paul: *Denkwürdigkeiten eines Nervenkranken*. Hrsg. von Gerd Busse. Psychosozial Verlag. Gießen. 2003. を参照した。

<sup>2</sup> Vgl. Linse, Ulrich: *Das Buch der Wunder und Geheimwissenschaften*. In: *Das bewegte Buch*. Hrsg. von Mark Lemstedt u. Andreas Herzog. Wiesbaden. 1999, S.239ff.

しかしながら 19 世紀後半および世紀転換期において、それは衰退に向かうよりむしろ最盛期を迎えようとしていた。英国においては、1873 年ごろにフレデリック・マイヤーズ(1843～1901)がつくった心霊研究サークルを母体として、1882 年に「心霊研究協会」(SPR)が発足した。SPR には心霊学専門の研究者だけでなく、物理化学者ウィリアム・クルックス(1832～1919)や哲学者ウィリアム・ジェイムズ(1842～1910)、物理学者のオリバー・ロッジ(1851～1930)など、当時世界的に著名な研究者たちが参加していた。

このような動きは、英国だけにとどまらず、フランスにおいてもカルデック(1804～1869)やフラマリオン(1842～1925)らによる心霊研究が流行し、ドイツではもともと批判的な立場だったものの、のちに共鳴することになったカール・デュ・プレル(1839～1899)やフリードリヒ・ツェルナー(1834～1882)らが英国流のスピリチュアリズムに影響を受けて、研究を進めていた。

ヨーロッパの他の国々に比べ、ドイツの心霊学研究に特徴があるとすれば、それが自然科学や自然哲学と密接に結びついていた点である。そこにはおそらく、心霊学が自然科学の研究成果——とりわけヘッケルの進化思想や物理化学分野における発見、または唯物論的自然科学——と密接にかかわり、その方法論を吸収してきた、という事情があったと考えられる。このような心霊学の流行は、ヨーロッパ全域(さらには日本にまで)に及んでいたのである。

本論文の目的は、シュレーバーの『回想録』において重要なモチーフである「光線」と言葉の結びつきを、ここまで説明してきた世紀転換期における自然科学と心霊学をめぐる議論の中で考え、シュレーバーの『回想録』が同時代の知識人たちが考えていた理論ないしイメージを、どのように共有しているのかを探ることにある。それはとりまなおさず、世紀転換期を生きた知識人たちのメンタリティを映し出すことにもなるだろう。

## 1. 神経に語りかける光線

まずシュレーバーにおいて「光線」とはどのようなものであったのか、本人が述べるところを参照しておきたい。

神は、元来神経そのものであり、身体ではない。それゆえ、神は人間の魂に類縁するも

のである。しかしながら、神の神経は人間の神経のように限られた数だけあるのではなく、無限にあるいは永遠に存在するのだ。神の神経も、人間の神経にそなわっているような、さまざまな特性を持っているが、その能力はあらゆる人間の概念を超えたものである。神の神経は、とりわけ被造物の世界のあらゆるものに身を移し変える能力がある。この機能において神の神経は光線と呼ばれる。そしてこの点にこそ、神の創造の本質があるのだ。<sup>3</sup>

シュレーバーは神の神経が、能力を発揮するさいに光線と呼ばれると述べているが、シュレーバーのもとにやってくるのは、神の光線ばかりではない。シュレーバーによれば死後人間の神経——人間の精神活動はすべて神経のなかにある——は、神によって抜き取られ、浄化を経て、神の世界へと導かれる。つまり死者の神経は、魂として神の一部をなすことになるわけだが、ここに集っている魂たちもまたシュレーバーの元へと飛来して、彼の神経へと絶え間なく語りかけるのだ。このような現象をシュレーバーは「神経接続」と呼び、その際に用いられる言語が「神経言語」であるとしている。

ふつうの言語のほかに、通常の健康な人間には意識されることのない、ある種の神経言語というものがある。これについてもっともわかりやすいイメージをえるには、わたしの考えでは、いくつかの単語を決められた順序で記憶に刻み込もうとするときの過程、つまり、たとえば学校で子供が、詩を暗唱するときとか、聖職者が教会でおこなう説教をそらんじるとき、といった過程を思い浮かべればいいだろう。そういったとき言葉は声に出さずに暗唱される。〈中略〉

正常な〈世界秩序にかなった〉状況のもとでは、この神経言語を使うことは、もちろんその神経をもつ本人の意思にのみ、左右される。だれも他人に神経言語を使うよう強制することはできない。しかし私は、上述の神経病の危機的な展開以来、わたしの神経が外部から、しかも絶えることなくひっきりなしに、動かされるという状況になったのである。<sup>4</sup>

---

<sup>3</sup> Schreber. S. 8.

<sup>4</sup> a. a. O. S.46.

神や魂たちの話す「神経言語」は、昼夜を分かたずシュレーバーの神経へと侵入する。「神経言語」による声は、単なる騒音としてだけでなく、思考の攪乱、身体の損傷、そして女性への変化という形で、さまざまな苦悩をもたらすのである。

この、光線と神の言葉の結びつきは、キリスト教的、あるいは哲学史的なコンテクストに鑑みれば、光線=神の導き、神の啓示であると考えられることもできるかもしれない。<sup>5</sup> しかしながら、シュレーバー自身のキリスト教への態度は微妙である。というのも、シュレーバーは当時流行の実証的自然科学の知識を吸収し、キリスト教の教義や世界観に疑いを抱いていたからである。宗教と科学の関係について、彼は以下のように述べている。

しかしながら私自身は、多くの自然科学的な事柄、とりわけいわゆる現代進化論に立脚する著作に取り組んできたために、少なくともキリスト教の教えることが、すべて文字通りの真実であるかどうかという点については、疑念を感じざるを得なかったのだ。全体的な印象としては、唯物論が神的な事柄についての最終決定ではないだろうという感じはしていたが、だからといって、なんとか人格的な神の存在への確かな信仰をもとうと努めたわけでもなく、信仰を守り続けることもできなかったのである。<sup>6</sup>

たいへん分かりにくい言い方をしているが、そのことからシュレーバーがキリスト教と自然科学との間で揺れ動いていたことがよく分かる。このような揺らぎは、シュレーバーだけでなく彼の生きた時代に共有された精神的態度であり、このことは彼自身が自らの理論的典拠としてあげている、当時流行の著作からも明らかである。先に述べた「現代進化論」以外にも、シュレーバーは自らの愛読書として以下のような著者および著作を挙げている。

いずれにせよ私が病気になる前の十年間に読んだ、哲学的・自然科学的な内容をもつ著作の中には、繰り返し読んだ本もあるので、そのうちのいくつかをここで挙げておこう。

---

<sup>5</sup> ハンス・ブルーメンベルク『光の形而上学』（生松敬三／熊田陽一郎訳、朝日出版社 1977 年）、参照。

<sup>6</sup> a. a. O. S.64.

というのもこれらの著作に含まれる思想が、この論文の中の多くの箇所反映しているのを見出すことができるだろうからだ。例としてこれらを挙げておく。ヘッケルの『自然創造史』、カスパリの『人間の原史』、デュ・プレルの『宇宙の発達史』、メードラーの『天文学』、カールス・シュテルネの『生成と消滅』、ヴィルヘルム・マイヤーの雑誌『天と地の間』、ノイマイヤーの『地球の歴史』、ランケの『人類』、エドゥアルト・フォン・ハルトマンの哲学的論文のうち、とりわけ雑誌『現代』に掲載されたもの等。<sup>7</sup>

また、シュレーパーはこの箇所以外にも、自らの病状をクレペリンの精神病理学教科書を参考に分析したり、<sup>8</sup> モーリツ・シュレーパーの『医療的室内体操』を参照したりもしている。<sup>9</sup>

---

<sup>7</sup> ebd. Anm.36. ここでシュレーパーが挙げている文献に関して、書誌情報を補完しておく。

Haeckel, Ernst (1834~1919): *Natürliche Schöpfungsgeschichte*. Berlin. 1868.

Caspari, Otto (1841~1917): *Urgeschichte der Menschheit*. 1873.

du Prel, Carl (1839~1899): *Entwicklungsgeschichte des Weltalls*. 1883.

von Mädler, Johann Heinrich (1794~1874): *Wunderbau des Weltalls, oder populäre Astronomie*. 1861.

Sterne, Carus (1839~1903): *Werden und Vergehen*. 1876.

Meyer, Wilhelm Max (1853~1910): *Himmel und Erde*. (Zeitschrift) 1889・1916

Neumayer, Merchior (1845~1890): *Erdgeschichte*. 1886.

Ranke, Johannes (1836~1916): *Der Mensch*. 1885.

von Hartmann, Eduard (1842~1906): *Die Gegenwart*. (Zeitschrift) 1872・1931.

<sup>8</sup> a.a.O. S.78. Anm.42.

<sup>9</sup> シュレーパーは以下のような文脈で父の体操書について言及している。

「ベッドにおいて男性は横向きに、女性は仰向けに寝る、(いわば「受け入れる側」としてつねに性交のさいに合致した状況にある)」ということを魂たちはよく知っていた。これまでの生活でこのようなことにまったく注目してこなかった私は、魂たちから初めて教わったのである。この問題について、私はたとえば、私の父の『医療的室内体操』を読んでみたが(第23版 102ページ)、医師たちでさえ、このようなことには詳しくなかったようである。」Schreiber: a. a. O., S. 166.

手元にある『医療的室内体操』第25版 [Daniel Gottlob Moritz Schreiber: *Ärztliche Zimmerymnastik*. Leipzig. 1894.] で、該当の箇所を探してみると、「病的で虚脱感を伴う度重なる夢精のための処方箋」についての項目であり(101ページから)、それに対応した体操のやり方が記されている。シュレーパーのいう102ページでは、ことにひどい場合の処方として、寝る前の半身冷水浴と水浣腸、また例外的に仰向けではなく、左右交互に寝返りをうって寝ること、そして起床後に性器と会陰部を洗浄することを勧めている。

シュレーパーの父および、当時のロマン主義的医学者および生理学者にとっては、睡眠はたいへん重要であった。モーリツ・シュレーパーが序文を書いた、カール・フィリップ・ハルトマンの『至福の教え』(初版1808年、シュレーパーは改訂版を編集)や、同時代人のエルンスト・フォン・フオイヒタースレーベン『魂の修練のために』(1838年)においては、睡眠の方法および効果について一章が

このいくつかの箇所を参考に、シュレーバーの読書傾向を分析することができよう。シュレーバーはヘッケルの自然史に代表される、進化論的著作あるいは宇宙や地球の歴史のような自然科学的な分野に大に関心があったということとはもはやいうまでもない。ここで注目すべき点は、思想史的には、唯物論的思考様式と心靈主義との間にいたカール・デュ・プレルや、ショーペンハウアーの影響を受けつつ『無意識の哲学』を著したフォン・ハルトマンのような思想家もふくまれているということである。では、ここまで見てきたシュレーバーの宗教・自然科学観やその読書傾向は、彼の『回想録』にどのように反映しているのだろうか。そしてそれを読み解くことは何を意味するのだろうか。

## 2. 光線と宇宙の図像化

シュレーバーが生きた 19 世紀後半という時期は、電気の光が世界を覆いつくそうとしていた時代であった。電気の光はひとびとに身体感覚を揺るがす大きなショックを与えたことだろう。このことは、シヴェルプシュの『闇を照らす光』<sup>10</sup> などにおいてすでに分析がなされてきた。また、竹中亨はこの当時の健康法ブーム——そこには体操や水泳などのスポーツだけでなく、日光浴や菜食主義も含まれる——の中に、電気の光を浴びる電光浴も存在していたことを挙げている。<sup>11</sup> 電気につわる多幸症的な人々のメンタリティについてここでは詳しく述べることはできないが、<sup>12</sup> これが自然科学者における電気の光や光線への興味の集中を、ますます助長したことは予想できよう。

イギリスの物理化学者ウィリアム・クルックスは、真空放電による光線の発生——この光線は今日「陰極線」と呼ばれる——の研究から、光線の正体を探ろうと試みたが、この研究はのちの、レントゲンによるエックス線の発見やマックスウェルの電磁波、アインシ

---

設けられている。シュレーバーのここでの言及の真意はよく分からないが、紙幅の都合上この問題については、稿を改めて論じたい。

<sup>10</sup> Schivelbusch, Wolfgang: *Lichtblicke*. Frankfurt am Main. 1983 /2004.

<sup>11</sup> 竹中亨『帰依する世紀末』（ミネルヴァ書房、2004 年）、229 頁。シヴェルプシュも前掲書において電気はこの当時、人体にとってのエネルギーであると考えられていたと述べている。Vgl. Schivelbusch, a. a. O. S.74.

<sup>12</sup> マーヴィンは、1890 年代ごろには、「電気の中には生命をよみがえらせることのできる神聖な力」があり、それによって「死をまだ永遠に食い止めることはできないとしても、少なくとも命を永らえさせることはできる」と考える人々が多数いたことを指摘している。キャロリン・マーヴィン『古いメディアが新しかったとき』（吉見・水越・伊藤訳、新曜社 2003 年）、254 頁。

ュタインによる光量子理論へとつながることになる。

また、キルヒホッフとブンゼンが 1860 年に発表したスペクトル分析法（図 1）<sup>13</sup>——のちに分光学として発展——は、太陽光などの光線がプリズムを通過した際にできる暗線と輝線の分布から、光源がどのような物質によって構成されているかを知ることができる画期的な方法として、光線の研究だけでなく、天文学や宇宙物理学などにも、多大な影響を及ぼした。つまり、スペクトル分析によって、従来の観察では決して到達しえなかった、惑

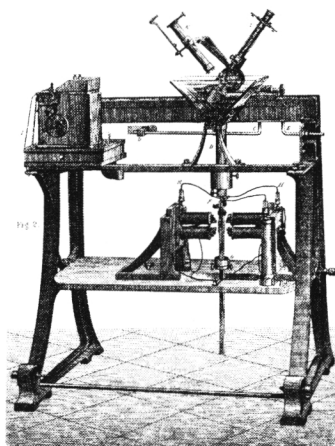


図 1 キルヒホッフの分光器

星の元素構成や物理的状态を知ることによって、はるか遠くの惑星の状態についても地球の研究と同様の方法で論じることができるようになったのである。（図 2）<sup>14</sup>

この発見は、これまでカント・ラプラスの星雲説を争点としていた宇宙の研究を加速させ、ダーウィンの進化論（1859 年）に影響を受けた、宇宙進化論の流行へとつながったのだ。カール・デュ・プレルは『宇宙の発達史』において、「われわれにとって星たちの唯一の言語は、予測もつかないほどはるかかなたからやってくる光である」<sup>15</sup> と光線のスペクトル分析が惑星の物質的特性を確定するさいの唯一の手がかりであることを強調し、また「地上と宇宙における法則の同一性は、それらの物質の同一性によって基礎付けられている——これは、経験的な事実から得られ

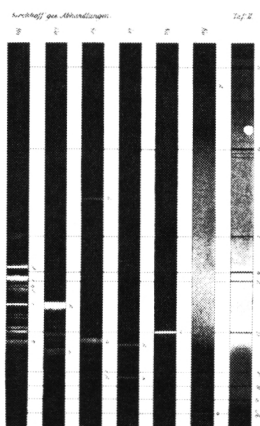


図 2 太陽光線のスペクトル

<sup>13</sup> Vgl. Kirchhoff, Gustav: Gesammelte Abhandlungen. Leipzig. 1882.

<sup>14</sup> Kirchhoff, a.a.O.

<sup>15</sup> du Prel: *Entwicklungsgeschichte des Weltalls*. S.46





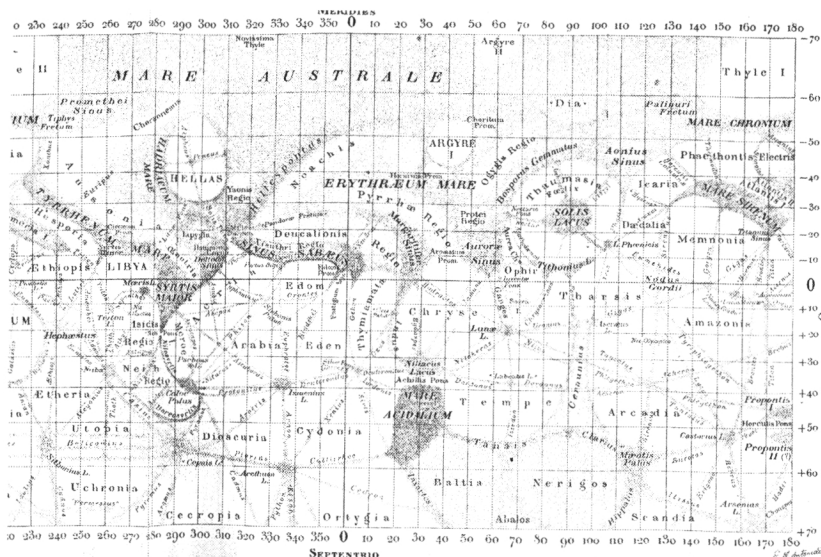


図 4 アントニアジによる火星図<sup>20</sup>

### 3. 可視化される魂の活動

エルンスト・ヘッケルは、もともと形態学を専攻していた。それゆえ彼の『自然創造史』において生物の進化の指標となるのは、形態の変化と神経系の発達である。しかしなぜ神経系の発達が、生命の進化した証といえるのだろうか。これは、彼にとって神経系の発達とは、思考能力の発達を意味し、思考能力の程度によって位階を定めることが、人類を頂点とするヒエラルキー形成に、どうしても必要だったからであると考えられる。ここでは、神経系と思考能力についてどのような言説が残されてきたのかを検証する。

19 世紀半ばに活躍した生理学者ヨハネス・ミュラー(1801~1858)は『人体生理学のて

に見えるはず、理論的にはこのようになってはいるはず)を込められた、偽りのイメージを提示しているだけである。それは、本来は把握不可能な天体のイメージを偽りの領域において、拡大再生産させることになる。その成果がフラマリオン(1802~1892)の火星の居住可能性についての研究や、アントニアジの詳細な火星地図であるといえることができるだろう。

ブルーメンベルク『コペルニクスの宇宙の生成 I』(後藤・小熊・座小田訳、法政大学出版局、2002 年)、157 頁参照。

<sup>20</sup> Flammarion, Camille : La planète mars et ses conditions d'habitabilité. Tome2. Paris. 1892.

びき』(1833)<sup>21</sup>において、人間の意志的神経の活動を、ピアノ演奏を例に挙げて説明している。つまり、脳が大腦表面につながっている鍵盤(神経)を叩いたなら、遠心性の神経に電流を生じさせ、それが筋肉の運動を引き起こすと考えたのである。ミュラーは、神経を動かす根本的な力を生命原理に求めた。彼の目的は感覚的な事象と物理的な力との関係を解明することであり、そのために生理学的な神経の活動だけでなく、感覚や印象の生成という心理学的な分野にまで踏み込んで叙述している。しかし、ミュラーの核心である、生命原理については、すべてを解明し得なかった。生命原理はすべての生命を構成する物質に宿る、物質的でない力とされているが、ミュラーはそれがどのようにして機能するのかという問題については、不可知のものとしてしまった。そこに生氣論者ミュラーの限界が顕になっている。<sup>22</sup>

ミュラーのピアノ仮説を批判したのが、自然形而上学者ヘルマン・ロッツェ(1817～1881)である。ロッツェによれば、ミュラーの説では、ピアノを叩くという動作をおこなう魂／生命原理に、空間的な存在要件を与えることになってしまうというのだ。ロッツェ自身の考えは、むしろ魂の活動領域を限定する方向へ向かっている。

我々が見てきたように、魂にできることは、魂の関与なしで自然の流れが身体的な変化と結びつくような内的状況を発生させたり、それを感受したりすることだけなのだ。<sup>23</sup>

魂は自ら仕事をするものではなく、その知らないやり方で、生命のメカニズムが魂の命令を遂行するのである。<sup>24</sup>

ロッツェにおける魂とは、身体を直接運動させるのではなく、その原因を導くだけである。実際に命令を下し、行動を起こさせるのが「生命のメカニズム」であるというのだ。そしてやはりここでも、魂および「生命のメカニズム」については不可知の力として放置さ

---

<sup>21</sup> Müller, Johannes: *Handbuch der Physiologie des Menschen*. Coblenz. 1833/1844.

<sup>22</sup> この点については、エドワード・S・リード『魂から心へ——心理学の誕生』(村田純一訳、青土社 2000年)、139頁以下、および川喜田愛朗『近代医学の史的基盤(下)』(岩波書店、1977年)、684頁以下を参照。

<sup>23</sup> Lotze, Rudolf Hermann: *Mikrokosmos*. Leipzig. 1896, S.340.

<sup>24</sup> a.a.O. S.373.

れてしまう。ロッツェもまた魂という概念の不確かさから逃れることはできなかったのだ。

しかしながら、これがのちのフレックシヒのような解剖学的脳神経学者になると、すでに魂の機能や物理的特性という問題は議論の埒外に追いやられてしまう。フレックシヒは今日、ガルの系譜に連なる大脳局在論者とされている。彼は人間の発生における脳の形成過程を、顕微鏡を用いて観察し、人間の思考器官の存在を確定した。フレックシヒは、あらゆる精神活動は、大脳の特定部位に対応し、精神的・神経的疾患は必ず特定の部位における損傷と対応するはずだという立場に立っていた。このような研究の結果、フレックシヒはシュレーバーがおそらく病院で見たであろう、詳細な大脳解剖図を描いたのである。(図5)<sup>25</sup>

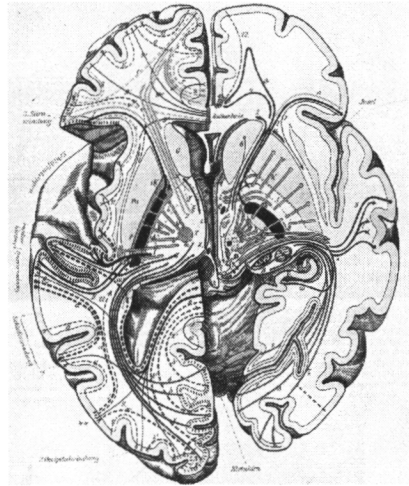


図5 フレックシヒの脳解剖図

大脳解剖図を見ること、解剖図から脳の損傷と精神疾患の関係を学ぶことは、世紀転換期における市民たちにとって、必須の教養の一つであったとさえいえる。川村邦光は明治期の日本における脳病・神経衰弱等の流行の起源が、脳および脳病の図像化によると考えている。通俗化された脳や神経の知識は、人びとに脳病・神経病の「病み方」を教え、彼らの靈魂を「一元的イデオロギー・一つの精神へと収斂」させたという。<sup>26</sup>

このように市民の生活を支配するべく浸透する、実証的自然科学の言説に対しての抵抗として、心霊学における魂の探究があったのではないだろうか。1880年代から1900年ごろの心霊学の流行において、クルックスやカール・デュ・プレル、フランスのカルデックそしてロシアのアレクサンダー・アクサコフらをその代表的な人物として挙げることができる。彼らは先に述べたような、神経解剖学・生理学的な研究を参照しつつ、交霊術や催

<sup>25</sup> Flechsig, Paul Emil: *Gehirn und Seele*. Leipzig 1896.

<sup>26</sup> 川村邦光『幻視する近代空間』(青土社、1997年)、121頁。

眠術、または念写実験などの方法——そこにはもちろん電氣的、機械的計測装置が用いられた——を駆使して、無意識状態における人間の精神活動を観察したり、死者の魂との交信を試みたりしていた。

デュ・プレルは、死後の人間の魂は、「私たちの眼には見えないが、人間の網膜よりも感度のすぐれた写真の乾板には写る」<sup>27</sup>と考えていたし、またアクサコフは『アニミズムとスピリティズム』に多くの心靈写真を取り上げている。(図6)<sup>28</sup> さらに1894年には、フランスのリシェらを中心にエクトプラズム——口、耳、鼻腔などから発生する細い糸や布のような物質。人間の顔や形を成すこともある(図7)<sup>29</sup>——の研究も始められた。<sup>30</sup>

今日の私たちにとって、心靈研究と実証的自然科学とを同列に論じるなどということは、あってはならないことのように思われる。しかしながら、彼ら双方が目指していた地点は、実は案外似通っていたと考えることはできないだろうか。実証的自然科学における、脳の解剖や、神経系の詳細な図式化にせよ、心靈研究における実験——写真、霊界との交信、エクトプラズムなど——にせよ、それらは、従来モノであるのか概念であるのか、はっきり区別することのできなかった、心あるいは魂を眼に見える形へと固定しようとする試みだったのだから。



図6 アクサコフが観察した心靈写真



図7エクトプラズム——何人もの顔が浮かび上がっているのが分かる。

<sup>27</sup> du Prel, Carl: *Der Tod Das Jenseits Das Leben im Jenseits*. München. 1899. S.26.

<sup>28</sup> Vgl. Aksakov, Alexander: *Animismus und Spiritismus* (übersetzt von Wittig) Leipzig 1894.

<sup>29</sup> 長谷正人、中村秀人編訳『アンチ・スペクタクル』(東京大学出版会 2003年)、201頁。

<sup>30</sup> イヴォンヌ・カステラン、『超心理学』(田中義廣訳、白水社1996年)、91頁。

#### 4. 外部と内部、あるいは可視化された世界をつなぐ光

これまでに論じてきた 19 世紀後半における物理学、生物学、神経生理学、そして心霊学において見出される一定の方向性がある。それは、世界の図像化・テキスト化である。

第2節にのべた、分光学と進化論をきっかけに流行した宇宙進化論的自然史という発想は、スペクトルすなわち可視的・解読可能な「言葉」(デュ・プレル)を用いて、全宇宙と地球をすべて一つの物語へと記述しようとする試みであった。同時に進化論者による系統樹や多世界論者の描いた火星地図は、この物語を図式化したものであった。彼らは人間とその外部の世界をテキスト化、図式化し、再生産可能なものとして捉えようとしたのである。

また第3節でとりあげた神経や魂についての研究は、人間の内面つまり脳や神経や魂の機能を解明し、眼に見えない人間の精神活動を、眼に見える形で表そうとしたと考えられよう。それはフレックシヒによる、ひと目で脳の機能と部位の一致を見て取れる、大脳解剖図や、不可視の魂を紙の上に定着させようとした心霊写真や、物質としての精神であるエクトプラズムにおいて見ることができる。

彼らの試みたことは、ともに人間を取り巻く世界を解読可能なものとして捉え、ひとまとまりのテキストへと整理すること、そして人間の外部世界と内部世界を同じ言葉で語ることであったといえよう。

この、外部世界と内部世界の接続という問題について、シュレーバーを参照しよう。シュレーバーは、自分の身体や精神が、自分の外部にある機関によって動かされ、管理されていると考えている。その外的な機関の中心が神であり、神に仕える死後の魂たちが、シュレーバーのもとへと光線として飛来しては、言葉によって彼を傷つける。それらの光線の前進基地のような機関——彼の言葉によれば「筆記制度」(*Aufschreibesystem*)といわれている——が宇宙空間に存在している。「筆記制度」についてシュレーバーは以下のように説明している。

記録簿ないし備忘録といったものがつけられるのであるが、そこには、いまやもうこの何年もの間、私のすべての思想、すべての慣用句、すべての日用品、その他私の所有するところとなった、あるいは私の近くにあったすべてのもの、私が交際するすべての人物等が筆記されているのである。筆記をつかさどるのが誰であるかも、私には確信をも

って言うことはできない。神の全能に知性が一切欠如しているとは考えられないので、私は筆記をつかさどる存在は遠く離れた天体に居住していて、かりそめに急ごしらえされた男たちのように、人間の姿が与えられた者たちではないかと推測している。それらには精神が一切欠如しているので、通りすがりの光線たちがいわばそれに筆を取らせて筆記させているのであろう。つまりそれらの者たちはまったく機械的に筆記という仕事をつかさどっているに過ぎないが、後になってやってくる光線は、筆記されたことがらをふたたび読み取るということができるのである。<sup>31</sup>（傍点は原著者）

シュレーバーのこれまでの記憶は、「どこか遠く離れた天体」に置かれ、<sup>32</sup> それらは「筆記資料」として、光線によってシュレーバーの思考へと運び込まれる。神や光線たちの目的はシュレーバーが言うには「私の悟性の破壊、すなわち私の痴呆化を目指す」<sup>33</sup> ことだという。しかし、シュレーバーはこのような光線の攻撃に対して「描き出し(Zeichnen)」という対抗手段をとる。

光線交流、つまり思考強迫の原因と関係する、さらに興味深い現象は「描き出し」といわれるものであって、私はすでに第 11 章でこれに短く言及しておいた。人間が、彼の記憶の中になお固着しているすべての回想を、それに関連する神経に残存している痕跡の力によって、いわば映像のように彼の脳髄の中に持つということは、おそらく私以外の誰にも、科学にすらも知られていないだろう。この映像は、光線によって内部の神経系が照らし出されている私の場合、意図的に再生産できるものであって、この再生産にこそ、描き出しの本質があるのだ。<sup>34</sup>

シュレーバーはこの「描き出し」によって、みずからの記憶やイメージを自由に読み出し、それによって光線の攻撃から身を守ることが出来るのである。記憶にとどめたイメージを自由に呼び戻し、表象することなど、通常の間人には不可能だが、「頭が光線に照らされ

---

<sup>31</sup> Schreber, a.a.O. S.126.

<sup>32</sup> a.a.O. S. 125.

<sup>33</sup> a.a.O. S. 129.

<sup>34</sup> a.a.O. S. 231.

た」シュレーバーのような人間にとっては造作もないことである。身体の中に取り込んだ光線を使って、DVD を再生するように、シュレーバーはみずからの記憶を呼び出し、映像として、魂たちに見せつける。「筆記制度」によって外部に保存された自分の記憶は、光線として彼のもとへとやってきては、逆に身体内部の神経に保存された記憶を呼び起こすために使われる。外部に保存された自分の記憶と神経内部に蓄えられた自分の記憶とは、互いに光線によって映しあい、言語としてあるいはイメージとして読み出されるのである。

シュレーバーにおいて、この一種の言説と光線の循環、あるいは交通関係は、他者の介在しない自分ひとりの世界で行われる。もはや世界滅亡後のだれもない世界で、痴呆化してしまった死者の魂たちに囲まれて暮らすシュレーバーにとっては、<sup>35</sup> 外部の世界は、外部（＝他者）の世界としての意味を失い、広大な自己の世界の一部となっているのだ。

<sup>36</sup> 自己の世界においては、出て行く情報も入ってくる情報も、すべてが自分の言葉によっ

---

<sup>35</sup> シュレーバーは、世界はすでに滅亡しているか、滅亡しかかっていると考えている。滅亡しかけた世界には、もはや生きている人間はシュレーバーしかいないというのだ。

「ヴィジョンの中で繰り返し話題となっていたのは、一万四千年にも及ぶ過去の成果が失われた——この数字はおそらく地球上に人間が住んでいた期間を示すものである——ということ、そして地球に残された期間はわずか 200 年ほどに過ぎない——私の思い違いでなければ、212 という数字が挙げられた——ということであった。フレックシヒの施設での入院生活の最後の時期には、私はこの存続期間がすでに切れてしまったものと考えていた。ゆえにわたしは私が唯一生き残った本物の人間であり、そのほか私が目にする人間の姿——フレックシヒ教授本人、数人の看護師、多かれ少なかれ奇怪な様子でごくわずかしかしい患者たち——は、単に奇跡によって捏造された「かりそめに急ごしらえされた男たち」であると思っていたのだ。」 Schreber, a.a.O. S. 71.

以上の箇所だけでなく、世界の滅亡については幾度も言及されている。

<sup>36</sup> シュレーバーにおける外部の世界と内部の世界の混同（あるいはその境界の消滅）については、「精神の目」についての記述が注目に値する。

「《精神の目で見える》という表現を私はすでに別の箇所（第 8 章 81 ページ）で用いたが、今もまた使うことにしよう。というのも、私たち人間の言語に、ほかにふさわしい表現が見つからないからである。私たちは、外界から与えられるあらゆる印象をいわゆる五感によって、とりわけ光感覚、音響感覚はすべて目と耳によって仲介されるものであると考えることに慣れている。このような考え方は通常の状況においては、正しいといえよう。しかしながら、ある人物、すなわち私のように、光線交流に入り、そのために光線によって頭が照り輝いているような人間の場合には、そのような考え方は余すところなく汲みつくしたものとはいえないだろう。私の場合、光感覚、音響感覚は、光線によって私の内部の神経系統に直接投射されるのであり、それらを受容するための外的な、視・聴覚器官を必要としないのである。」 Schreber, a.a.O. S. 120.

シュレーバーは、みずからの目——彼の言葉で言えば肉体の目——を用いるのではなく、光線によって伝えられる、外部からの情報により、通常の人間の感覚が到達し得ないほど遠い場所での出来事や、自分で見ることでできない身体表面での出来事をそのまま神経に投射されたイメージとして受容することができる、というのである。この《精神の目》のはたらきによって、シュレーバーはみずか



て秩序付けられる。

内部の世界と外部の世界、私の精神の領域と私を取り巻く世界が、同じ原則に則って動いているというイメージ。シュレーバーだけにかぎったことではない、これまでにとりあげてきた多くの人物——ヘッケルやデュ・プレル、フラマリオンやロツェ——はみな一緒に、彼らの見出した諸法則のもとに、外の世界と内側の世界を結び付けようと試みたのである。世界は一個の有機体、ないし機械である、というのが彼らの主張である。しかしながら一体どうして、そう言い切れるのか。

ニーチェは彼らの活動時期とほぼ同時代の 1882 年に刊行された『悦ばしき知識』において、「知性が非常に長い時間をかけて生み出してきたものは、誤謬以外の何ものでもなかった」<sup>37</sup> と科学的認識を断罪する。科学的な実験や観察によって得られたモデルや理論といったものは、たしかに自然の法則に則ってはいるだろうが、それはわれわれ人間が、われわれ人間の認識能力を用いて解釈する場合にのみ、真理であるにすぎない。ニーチェはさらに自然科学的に、自然の観察から得られた知識をこのように批判している。

われわれは、線とか平面とか物体とか原子とか可分的時間とか可分的空間とかいった、実のところ在りもしないものばかりを借りて操作するが、——われわれが一切をなによりまず表象に、われわれにとつての表象にしないことには、どうして説明などできるだろうか！科学を、可能な限りそっくりそのままの事物の人間化と見るだけで、充分だ。われわれは事物とその連続を記述することによって、いよいよ正確にわれわれ自身を記述することを習得するのだ。<sup>38</sup> （傍点は引用者）

シュレーバーは、自分の身体内部での出来事も、遠い神の世界での出来事やこの世界の将来をも、すべて自分ひとりの言葉で理解し、語りつくしてしまう。それこそは、ニーチェの言う「可能な限りそっくりそのままの事物の人間化」、つまりは世界の擬人化である。世界滅亡後の誰もいない世界を生きるシュレーバーにおいては、事態はもっと悲惨である。

---

らの肉体という壁を越え、知覚可能な領域を無限大に拡大しているのだ。

<sup>37</sup> Nietzsche, Friedrich: *Sämtliche Werke. Kritische Studienausgabe, Bd.3.* Coli, Giorgio/ Montinari, Mazzino(Hrsg). Berlin/ New York 1980, S. 469.

<sup>38</sup> a.a.O. S. 473.

人間たちという共通項を失った世界において、彼の発見した認識を支えるのは、彼自身、ただ一人である。取り残されたシュレーバーは、自分だけの自分のための、世界像を作り上げていくのだ。

これを誤謬ということはたしかに簡単だ。しかしながら、本論考が対象とする光と言葉の結びつきという現象は、まさにこの誤謬、人間の言葉による世界全体の記述という問題に、その根源を求めることができるのではないか。外の世界からやってくる太陽や他の天体の光、そしてその反射光である地上の光に包まれて生きる私たち、世界を観察し、記述してきた言葉は、一筋の光に乗って、すべてが記述可能であるという予感へと変わる。

デュ・プレルは、催眠術や交霊術によって、無意識状態の人間と交流が可能なのではないかと考えていた。その著書『死、彼岸、彼岸における生』のなかで「思考は、それを移し換え、被験者の脳に再生されるようなエーテル的波動へと解消される」<sup>39</sup> と述べている。また、エドゥアルト・フォン・ハルトマンは心靈主義を批判しながらも、交霊術における超常現象は、霊媒の神経力が参加者に作用し、ある種の「絶対的電話接続」を結ぶのだと考えた。<sup>40</sup> 化学者のクルックスも、英国科学振興協会における演説において、X線と同様に、われわれの思考を伝達する極小の波動が存在することを予言している。<sup>41</sup> また、第二節で言及した火星研究者たちは、火星人ととの交信を試みている。フランシス・ゴールトン は、光を使ったモールス信号的な通信手段を仮想しているし、<sup>42</sup> フラマリオンは火星表面の光点が、火星人による建造物であるとすれば、そこから信号が発せられているかもしれないと考えた。<sup>43</sup>

---

<sup>39</sup> du Prel: *Der Tod Das Jenseits Das Leben im Jenseits*. S.23.

<sup>40</sup> Kiesewetter, Karl: *Geschichte des neueren Occultismus*. Hildesheim. 1977, S.711.

Hagen, Wolfgang: *Radio Schreber*. Weimar. 2001, S.51ff.

<sup>41</sup> Crookes, William: *Report of the sixty-eighth meeting of the British Association for the Advancement of Science*. London. 1899.

また、1903年にナンシー大学のブロンロやシャルパンティエはX線を増幅する際に、新たな放射線を発見し、N線と名づけた。彼らによれば、N線は人間の神経系および脳髄から発せられ、人の思念を外在化することができるという。しかし、多くの研究者の実験によりN線は実在しないことが判明した。

Vgl. Blondlot, Rene, J. Garcin(translation): „*N* Rays. NewYork. Bombay. 1904. Piéron, Henri: *Grandeur et décadence des rayons N*. In: *L'Année psychologique*. Paris. 1907, p. 143.

<sup>42</sup> Galton, Francis: *Intelligible Signals between Neighbouring Stars*. In: *Fortnightly Review*. vol.60. 1896, S. 657.

<sup>43</sup> カミーユ・フラマリオン『星空遍路』(武者金吉 訳 文明協会 1927年)、236頁以下。フラマリオン

思考が波動や放射線のような形で人から物、あるいは人から人へと移し変えられるという発想は、何もヨーロッパに限られたことではない。20世紀初頭の日本においても、東大心理学教授福来友吉が、千里眼研究、すなわちカメラと乾板を用いた思考の転写とその原理の究明についての研究をおこなったことは、よく知られている。福来のライヴアルの一人であった京都帝大文科大学心理学専攻(現：京大文学部)の学生、三浦恒助は長尾幾子の念写術を分析して、頭脳から写真機の乾板へと、未発見の放射線が発せられていると考え、それを「京大光線」と名づけた。<sup>44</sup>

彼らの発見や推論、そして憶測は、結局のところ現代においてもまだ科学的真理とはなりえていないし、詐術や妄言であると断定されてもいる。しかしながら、それはたいした問題ではない。ここで注目しておきたいのは、不可視の光線(放射線・波動など)を媒介として、外部と内部が言葉によって結びつき、その境界線が解消されてしまうということである。太陽光線がスペクトルへと分解されたことが、惑星の歴史と地球や人類の歴史を一直線につなぐ光となったように、彼らの世界は光と結びついた言葉によって、すべてが照らされ、読み出されなければならないのである。光線の中に言葉を聞き取るシュレーバーは、彼らが推論にとどめていた、その彼岸をみずからの体験として『回想録』に書き記したのである。

## 5. 不可知の領域の発見

先ほど指摘したように、シュレーバーにおける全世界は、自らのうちにある記憶と、外側に保存された記憶との、光と言葉を介した交通関係による無限につづく対話から成り立っている。シュレーバーの云う神は、死者たちの言説(魂たち)を集めてその身体を構成し、それらを光線としてあらゆる創造行為のために、または世界秩序維持のために行使す

---

は、地球よりも文明の進んだ火星の人ならば、地球への電信は可能であり、それにわれわれが気づいていないだけであると述べている。そして、近い将来無線通信によって、地球からの発信も可能になると予測している。

<sup>44</sup> 大阪朝日新聞は以下のように報じている。

「…幾子の放射線は物理学、電気、生理学等より見るも従来に類例なき新放射線と認むるの外なく依て氏は茲に仮に此新発生の放射線を名付けて京大光線と名付くべしと…」「透視研究大問題の試験」『大阪朝日新聞』明治43年12月24日。

る（もちろんそこにはシュレーバーの脱男性化や痴呆化、新たな人類創出の目論見も含まれている）。一方のシュレーバーは、光線として彼のもとに押し寄せる魂たちを身体に取り込んで、神経に書き込まれた記憶を読み出し、神に向かって開示して、神や魂たちの目を欺こうとする。もはや説明するまでもないが、神の奇跡や「筆記制度」による攻撃も、シュレーバーによる「描き出し」も、やっていることはほとんど変わらないのだ。シュレーバーと彼の云う神とは、表裏一体の関係であり、互いを無限に写し合う合わせ鏡なのである。

シュレーバーと神とが、一対一の対称関係であるとすれば、彼は世界の出来事すべてを認識し、世界を動かしているということになるのだろうか。いや、そうではない。事実シュレーバーは苦しんでいる。神の光線によって、思考をかき乱され、身体を傷つけられ、男性性を奪われようとしている。そして同時に、光線を集めて精神の安定を得たり、「魂の官能的快楽」にふけったりもしている。この苦しみや悦びは、どこからくるのか。シュレーバーの世界には、いまだ彼自身理解し得ない、そして自らが理解し得ないということを確認することができない不可知の領域、あるいは不可知の力があるのではないだろうか。シュレーバー自身、それについて以下のような予測を述べている。

あらゆることにおいて、光線にとってはおそらく理解不可能であるが、人間にとってはたいへん重要な目的思考が、私を導かなければならない。つまり私は、いつどの瞬間においても、自問しなければならぬ。お前はいま眠りたいのか、あるいは少なくとも休憩したいのか、あるいは精神的作業を行いたいのか、あるいは肉体的機能を発揮したいのか、たとえば排泄したいのか、などなど。あらゆる目的の達成には私の場合、いつも全光線の統合が必要なのであり、排泄のためにすらそうなのである。<sup>45</sup>

シュレーバーを動かしているのは、「目的思考」である。あらゆる行動、意思的・無意識的、あるいは本能的な行動までもが、「目的思考」に支配されているのである。「目的思考」によって、彼の世界を動かしているのは、おそらくシュレーバー自身であろう。あらゆることを自問し、決定し、行動に移す。これらすべてはシュレーバーひとりによってな

---

<sup>45</sup> Schreber, a.a.O. S. 314.

されているはずである。そうでなければ、彼は生きることができない。たとえば、光線によって身体をずたずたにされたシュレーバーは、なくなったはずの胃袋に、食べ物を詰め込み、消化して、生きながらえる。

他の人間にこのようなことがおこったら、もちろん化膿状態が生じて、間違いなく命を落とすことになるに違いない。しかし私の場合には、身体中のどの部分に糜<sup>びじやく</sup>粥がいきわたっても害にはならなかった。というのは体内のすべての不純物は光線によってふたび吸い取られたからである。私は、その結果、のちには胃がないことなどまったく気にせずに、闇雲に食べることを繰り返した。しだいに私はそもそも身体にどんなことが起ころうと、完全に無関心な態度をとることに慣れてしまった。自然の病気であれば、どんな病気であれ、私がその感染に対し抵抗力を持っているということは、今もお私の確信するところである。いや、それどころか、光線との交信関係が持続する限り、私がそもそも死ぬということがありうるのかどうか、そしてまたたとえば強力な毒薬を服用しても私の生命や健康に本質的な害が及ぶのかどうか、私の中に大きな疑いが生じつつある。<sup>46</sup>

もし神がシュレーバーを動かしているのであれば、胃袋を失ったシュレーバーはそのまま殺されていたかもしれない。しかしながら、彼は生き延びている。彼が身体の損傷を氣にとめなくなると、今度は光線が本来の創造的作用によって、胃やなくなった器官を回復させるのである。随分と都合のいい話だが、シュレーバー自身にとっては、もはや考えるのもばかばかしくなるくらい不可解な状況なのだろう。この、不可解であることが重要である。

シュレーバーが神の攻撃をかわし、神をも含めた世界の没落を懸念し、「そもそも死ぬということがあるのか」と考えるほどに全能者の立場へと上昇するのに対し、そもそもの全能者であったはずの神は、全能性を疑われるようになる。

すくなくともこの5年ほどで、私は、世界秩序が、ひとりの人間の悟性を破壊する手段

---

<sup>46</sup> a.a.O. S. 152.

を神にさえも与えていないことがはっきりわかってきた。(傍点は引用者)<sup>47</sup>

神はありとあらゆるものを創造し、統御してきたはずである。しかしながら神をもその一部とする世界秩序は、神ですら動かすことはできない。神自身もまた、世界秩序という大きな力の前では無力なのである。<sup>48</sup> ここで、第一章に簡単に説明しておいた世界秩序が、ほとんど「目的思考」と同様の意味を持つことが分かる。

それでは、ふたたび「目的思考」について考え直してみよう。なぜ「目的思考が、私を導かなければならない」のだろうか。目的思考とは、シュレーバーの内で機能するが、その外部にある決定機関なのだろうか。だとすれば、なぜ彼は外的な決定機関などというめんどくさいものを設定しなければならなかったのか。そこに、完璧に構築されていくシュレーバーの世界におけるわずかな、しかしながら底知れない深さをもった闇の領域が顔をのぞかせてしまうのではないか。自分のなかにあるはずなのに、どうしても自分には分からない秩序、あるいは力が、彼の思考と運動に、たえずブレーキをかけてしまうのだ。

シュレーバーはみずからの写しとしての神を創造し、そこから得られる断片的な情報を構成して世界のすべてを理解していたはずだ。それなのに、彼自身があらゆる決定を自由に下すことはできない。もちろんシュレーバーは神と入れ替わることはできないが、そもそも神にだって、世界秩序を勝手に変更することはできないし、それによって生じる混乱の収束にも、ほとんど無為無策なのだ。シュレーバー本人のもうひとつの側面と考えられる神と魂たちの世界は、彼の内部であると同時に外部である。そして、彼を阻害し、ブレーキをかけさせる存在であるが、同時にそれらがシュレーバーを動かしているというわけでもない。一体シュレーバーは、この目的思考という概念で何を考えようとしていたのだろう。

ここで、この当時、自由意志の不可能性ということが、大きな学問上の問題であったことを想起しておきたい。ヘッケルは『宇宙の謎』において、人間の意識とは高等動物においてその神経系を形成する「靈魂素」に宿るものであり、それは無機物の原子が持つ親和

---

<sup>47</sup> a.a.O. S. 204.

<sup>48</sup> シュレーバーは、神がいかにも人間に関して無知で、ばかげた作戦や戦略を繰り返しては、そのつど何の効果も挙げられていないか、ということを冷静に分析している。Vgl. a.a.O. SS. 264ff.

力や、意志を意味する「原子靈魂」と大して変わらないと考えていた。<sup>49</sup> また、人間の意識は物質的なものであるから、自然の秩序によって動かされ、自由な意志ではなく、個体の死とともに消滅するものだとしている。これに対し、デュ・ボア・レーモンは、『宇宙の七つの謎』の第七の謎としてこの「意志の自由」の不可知性をとりあげた。デュ・ボア・レーモンは、ヘッケルが物理的条件や機械論的考察によって発見できない物質や人間の意志を前提としていることを批判している。それは唯物論として矛盾しているというのだ。<sup>50</sup>

他方デュ・プレルはヘッケルの進化論に影響されて、『宇宙の発達史』を書いたが、その終わりに一元論的世界観への懐疑を表明している。

われわれが、プラトンの二元論にも、一元論者たちの死した物質という考え方にも依拠したくないのであれば、原子靈魂説から逃れるためには、ただひとつの出口しか残されていないだろう。それは、プラトンのいう超越的な彼岸を、超越論的、認識論的な彼岸へと変え、四次元の擁護者とともに、わたしたちを取り巻く世界は三次元的な認識装置による、四次元的世界の投影された像であるということを仮定することだけである。<sup>51</sup>

デュ・プレルにとって、認識不可能であるとわれわれが考えているものは、単にわれわれにとって認識不可能なのであり、四次元的感覚世界へと移行すれば、認識可能であると考えていたのである。たかだか通常の人間が認識できる世界の枠内だけが、世界のすべてだなどという主張は、デュ・プレルにとって笑止千万なものだったのだ。<sup>52</sup> それゆえ彼は、催眠や交霊術の研究から、人間に隠されたさらなる認識能力や、死後の人間の精神がもつ可能性へと研究の幅を広げていったのである。

---

<sup>49</sup> Haeckel, Ernst: *Die Welträtsel*. Stuttgart. 1919/1984, S. 255.

<sup>50</sup> du Bois-Raymond, Emil: *Vorträge über Philosophie und Gesellschaft*. Berlin 1974, S.166.

<sup>51</sup> du Prel, a.a.O. S.359.

<sup>52</sup> デュ・プレルは当時流行した多世界論についても多く言及している。彼は『神秘哲学』のなかで、仮にいつの日か宇宙唯物論者会議のようなものが開かれたら、それぞれの星のビュヒナーのような連中が参加するだろうが、自らの感覚と認識にしか頼らない彼らは、きっとほとんど何も得ることはできないだろうと述べ、超自然的・観念的宇宙観を一切認めないルートヴィヒ・ビュヒナーらを批判している。du Prel: *Die Philosophie der Mystik*. Leipzig. 1910, S. 530.

あるいは、彼らが直面していたのは、無意識の発見とも言うべき事態だったのかもしれない。実際、1868年に出版されたエドゥアルト・フォン・ハルトマンの『無意識の哲学』は、19世紀後半にもっともよく読まれた哲学書<sup>53</sup>といわれるほど、「無意識」とはアクチュアルな術語だったのだから。<sup>54</sup> しかしながら、ハルトマンが心理学的・生理学的考察を通じて形而上学的に構築した無意識とは、のちにフロイトが考えた無意識——個人の生活史における抑圧された欲望の蓄積——のようなものではなかった。ハルトマンにおける「無意識」とは、これまで神の領域とみなされていた、世界の不可知の部分に「無意識」という語をおいただけで、先行するフィヒテやヘーゲルと比べて別段新しいものではなかったのである。

シュレーバーは、目的思考という名の、自由な意志をさまたげ、意識しようにも意識できない、不可知の領域あるいは不可知の力を探り当てた。そこには、ここまで見てきたような、無意識をめぐる思想や無意識状態における人間の諸能力についての探究の影響が見られることはいうまでもない。目的思考イコール無意識であると結論付けることは簡単だが、やはりそこには、いくつかの留保が必要である。<sup>55</sup>

この節では、光線によって照らし出された内部と外部の世界が、言葉によってひとつにつながり、何もかも理解可能であるとされた世界に、どうにも避けようもなく開いてしまった一つの亀裂としての目的思考について、そのありようを概観するにとどまったわけだが、これがいかなる背景をもってシュレーバーの思考回路に入り込んだのか、あるいは同時代の無意識をめぐる言説とどのような関連を持つのか、という点については稿を改めて論じることにした。

---

<sup>53</sup> エドワード・S・リード『魂から心へ 心理学の誕生』、200頁。

<sup>54</sup> 多賀茂によればハルトマンの『無意識の哲学』は、出版後10年にも満たないうちにフランス語訳が出されたという。これに対しショーペンハウアーの『意志と表象としての世界』のフランス語訳は1886年、ニーチェの受容は1890年代以降である。このことから、彼の影響力がどれほどのものであったかが想像できよう。多賀茂『象徴の場としての無意識 ハルトマン、ヘルムホルツ、ルスロ』、『宇佐美齊編『象徴主義の光と影』(ミネルヴァ書房、1997)、248-261頁]、248頁。

<sup>55</sup> 無意識という術語を使った場合、それがフロイト的なものであるのか、それともハルトマン的な意味での無意識なのか、あるいはそのどちらでもないのか、ということを取りあえずははっきりさせなければならぬだろうが、シュレーバーのいう「目的思考」を既存の精神分析学、あるいは形而上学の理論によって読み解くことは少なくとも本論の目的とするところではない。しかしながらフロイトやハルトマンの「無意識」の思想は、それらの登場した背景を描き出すことによって、シュレーバー研究にとっても大きな意味を持つことはいうまでもない。



## むすび

本稿では以上のように、シュレーバーにおける光線と言葉の結びつきを、同時代の自然科学および心霊学の言説の中から考察し、その発想が、同時代的に見られる、精神活動の可視化・図像化という予感あるいは願望を吸収したものであることを示した。最先端の、流行の知識を吸収したシュレーバーは、それらの著者たちが勇み足的に表明してしまった根拠のない仮説や、いまだ科学的事実とはいい難い予感をも共有し、その世界観を構築していったのである。そして彼の同時代人が不可知の領域と位置づけた人間の自由意志、あるいは自己意識の問題の前に、彼もまた苦闘したのである。

シュレーバーは宇宙空間に、自らの記録が保存されている機関を想像した。彼の世界が、彼自身が作り出した神の世界との映し合い、すなわちシュレーバーの自己意識の反映によって構築されているのであれば、なにゆえ彼の自己意識は、宇宙へと拡散してしまったのだろうか。人間の感覚器官である自らの身体を飛び越えた自己意識とは、一体どういうことなのだろうか。宇宙空間を通した死者の魂との対話とは、いったいどこで誰によってなされているのだろうか。これらの問いについては、さらなる考察が必要である。